

しゅとう

種痘で人々の命を — 緒方洪庵 —

おがたこうあん

「お、お母ちゃん。いて、いてえよう。」

たえきれない苦しさにもがきながら、弱々しく動かしている男の子の手足に、そして、高い熱のために赤らんだ顔やのどにも、先の赤いつぶつぶがはつきり見られます。

「これは、まちがいなく天然痘だ。このままでは死んでしまう。何とか助けることができたとしても、できもののあとが顔一面に残るだろう。種痘の種がほしい。種さえあればなあ。」

大阪で町の人々を治療していた緒方洪庵先生の顔色は、厳しくもつっていました。

今までにも、天然痘で苦しむ人を何度も見ながら、どうすることもできなかつた洪庵先生は、イギリスやオランダで天然痘の治療に使われている種痘の種が、ほしくてたまりませんでした。種痘の種さえあれば、このいたましい病気から、大勢の人々を救うことができるのです。



緒方洪庵像 岡山市北区足守

しばらくして、その種痘の種が、日本にも伝えられました。オランダの人が長崎に持ってきた
その種が、京都の笠原白翁という先生の所へ届いたのです。

このことを伝え聞いた洪庵先生は、ぜひその種をゆずり受け、町の人々を助けたいと考え、大
急ぎで大阪から白翁先生をたずねました。

「わたしは、天然痘にかかって死んだり、顔一面にできもののあとが残ったりするかも知れない
大勢の人を救いたいのです。白翁先生、どうかお願ひです。種を少し分けてください。」

と、たたみに額をこすり付けるようにしてたのみました。

洪庵先生の、広く人々の命を思う心と熱心さに動かされた白翁先生は、種痘の種を分けてくれ
たのでした。洪庵先生はあまりのうれしさになみだを流して、白翁先生の手をしつかりとにぎり
しめました。

やつと手に入れた種痘の種です。洪庵先生は、弟子といっしょに、町の人々にこの種を使つて
種痘を広めようとしました。ところがこまつたことに、種痘を受けてくれる人がいないのです。
人々は、種痘が安全で、天然痘の予防にとてもよいことを知りませんでした。種痘をしたら、か
えつて天然痘になるのだという、あやまつた考えを信じていたのです。

（どうしたら人々に種痘を信じてもらえるのだろう…。）

洪庵先生の心の中には、顔一面に広がったむらさき色のできのから、血の混じたうみを流
しながら死んでいった人々の苦しみがやきついていたのです。

（種痘の種が手に入ったのだ。もう、あのような病人を出してはならない。いちばん大切な人間
の命を守らなければ…。）

こうした苦労が三年も続いて、やつと町の人々は、洪庵先生の言うことを信じるようになります。種痘を受けるためにたずねてくる人々が、一日一日と増えるようになってきたのです。

このことは、洪庵先生の生まれ育った足守藩（現在の岡山市北区足守）にも伝わりました。さつそく足守によりよせられた洪庵先生は「除痘館」という所で、足守や近くの村々の、およそ五千人の人々に種痘をしました。

また、先生は、そんないそがしい間にも、町の人々の病気を診察し、貧しくてお金をはらえない人も、分けへだてなく治療しました。さらに、医学を志す後はいのために、ドイツの医師が書いた『医者の心得』を翻訳し、どんな患者に対しても、平等に接することの大切さを伝えました。



洪庵先生の願いは、日本中に種痘を広め、天然痘から人々の命を守ることでした。

その願いは、先生の死後、二十年ほどで見事にかなえられ、今では、天然痘のおそろしささえ、知られなくなつたのです。

※天然痘：皮膚にうみがたまつたできものがで、高熱が出る病気。今は予防ができる。

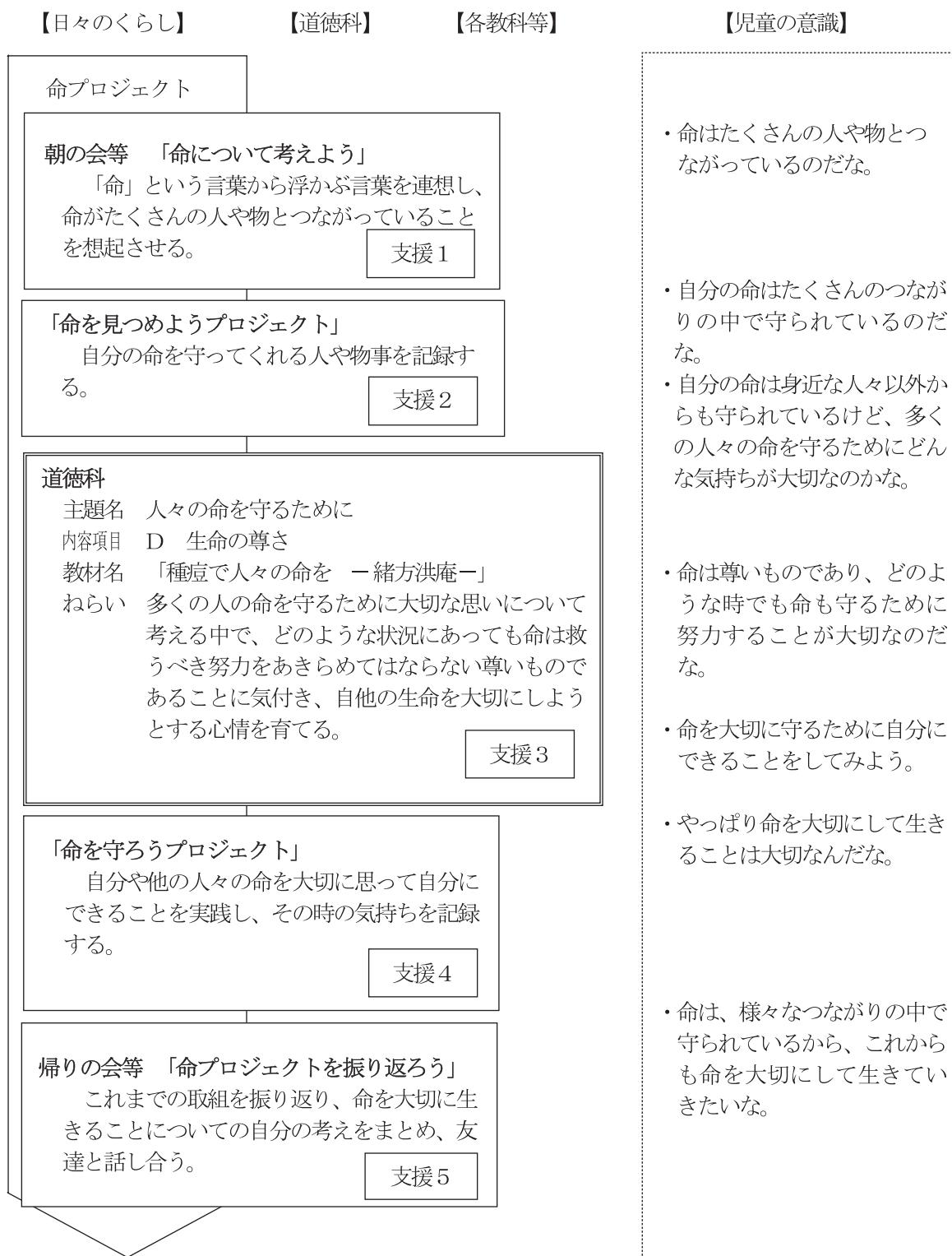
※種痘：天然痘を防ぐために、行われた予防接種のこと。当時は皮膚に傷をつけ、そこに種痘の種を付ける方法が行われていた。

1 関連的な道徳の学習のテーマ つながりの中で守られる命

2 関連的な道徳の学習のねらい

道徳科を要として、日々の暮らしと関連を図りながら「命プロジェクト」として学習を進めることで、自分の命を見つめ直して命のかけがえのなさを実感するとともに、命を守るために活動する人々の姿や自分の命を支えてくれるたくさんの人々の思いに触れることで、自分や他の人の命を守り、大切にして生きていこうとする態度を養う。

3 構想図 (10月下旬～11月上旬)



4 教師の支援

支援1－道徳的価値に対する構えに高めるために

朝の学習の時間などを使って、「命」という言葉から連想する言葉を黒板に書いてイメージを広げる活動を行うことで、命がたくさんの人や物と関係していることに気付き、価値に対する構えをもつことができるようになる。

支援2－心を耕し、課題意識を高めるために

「命を見つめようプロジェクト」では、日々の暮らしの中で、自分の命を守ってくれている人々や団体を見つけて記録することを通して、自分の命は家族や医者など色々な人から守られていることに気付くことができるようになる。そして、記録を振り返ることで、「身近な人以外にも自分の命を守ってくれている人がいるが、その人たちとはどのような気持ちで守ってくれているのだろう」という課題意識へと高めることができるようになる。

支援3－それまでに抱いた気持ちを道徳科で語るために

導入では、「命を見つめようプロジェクト」を振り返り、「多くの人の命を守るためにどのような気持ちが大切か考えよう」という課題を明確にすることで、本時の学習の見通しがもてるようになる。

展開前段では、中心場面として、主人公の緒方洪庵が、雨の日も風の日も町に出かけて天然痘の予防に努めていた時に思っていたことについて考えることで、命は尊いものであり、どのような時でも命を守るために努力することが大切であることに気付くことができるようになる。その際、種痘の大切さを誰にも理解されず、あきらめそうになった日もあったかもしれないが、あきらめなかつた理由を問うことで、命を支えてくれている多くの人々の行為と重ね合わせながら、どのような状況になっても、命は守らなければならない尊いものであることに気付くことができるようになる。

展開後段では、命を守るために自分自身が意識していることについて振り返ることで、自他の生命を大切にして生きる意欲につなぐことができるようになる。

支援4－道徳科で捉えたことを確かにするために

道徳科で捉えた「これからも自分や他の人の命を大切にしながら生きていきたい。」という思いから、日々の暮らしの中で「命を守ろうプロジェクト」を行うことで、自分や他の人の命を大切に思って行動したこととその感想を記録する。この活動を通して、どのような状況にあっても自分や他の人の生命を大切に守ろうとする心情を育てることができるようになる。

支援5－自分の変容に気付き意欲的になるために

これまでの学習で記録してきたことを見直し、命を大切にして生きることについて自分の思いや考えがどのように変容したのかについて振り返りを書き、話し合うことで、自他の命がたくさんの人々の支えによって生かされていることに気付き、全ての命を大切にしようとする思いをより一層強くもたせることができるようになる。

5 要となる道徳科

(1) 主題名 人々の命を守るために

(2) 主題設定の理由

① 内容項目について

中心とする内容項目は、D 生命の尊さ「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。」である。普段の暮らしの中で命の尊さについて意識することは少ない。そこで、命の重さやかけがえのなさを感じたり、命を大切にするということを真剣に考えたりすることが大切である。この時期には、自分は多くの人々に守られて生きていることに気付き、自分の命だけでなく、他の生命を救い守り抜こうとする人間の姿の尊さを感じることができるようにしていきたい。

② 児童の実態について

関連的な道徳の学習の中で、日々の暮らし「命について考えよう」を通して、命がたくさんの人々や物とつながっていることに気付き、さらに、「命を見つめようプロジェクト」を通して、自分の命が親や身近に接する人々などたくさんの人々から守られていることを実感しており、命は大切にしなければならないと思っている。しかし、親や身近に接する人々以外の人々が他人である自分たちの命を守ろうとどのような気持ちで活動しているのかについてはあまり意識していない。

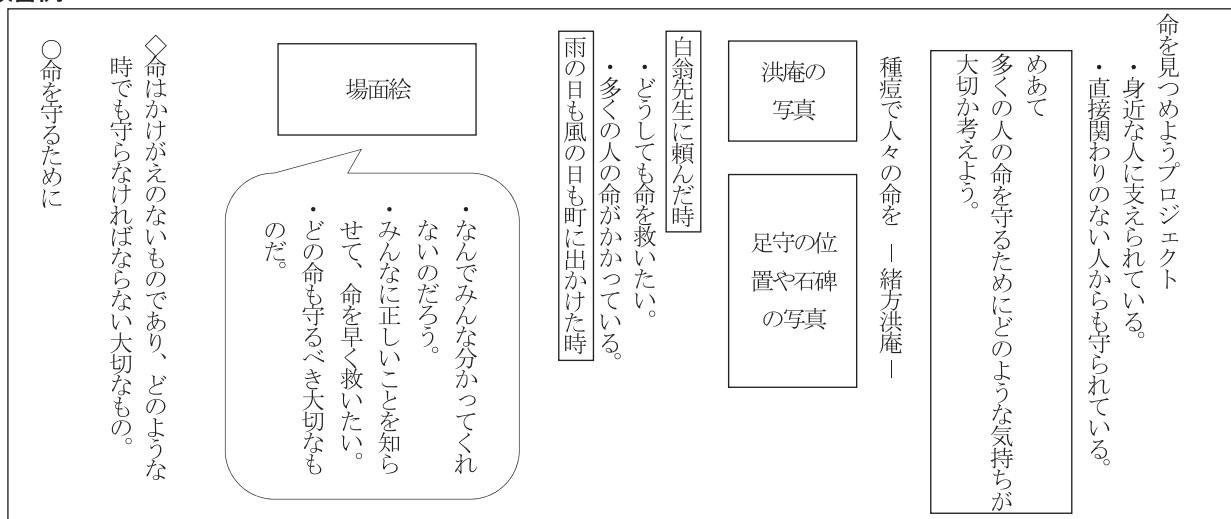
そこで、人々の命を守ろうとする時の大切な気持ちについて考えることを通して、命はかけがえのないものであり、何よりも尊重していこうとする心情を育てたい。

③ 教材について

本教材は、江戸時代後期に、当時外国から伝わったばかりの種痘によって、天然痘で苦しむ多くの人々の命を守った緒方洪庵の話である。

天然痘という感染症や当時の時代背景を押さえた上で、「種痘」の大切さを説いて回る場面に焦点を当て、洪庵の行動は富や名声のためでなく、純粋に人々の生命を守りたいという願いに支えられていたことに気付いていけるようにする。また、足守の位置を地図で確認し、また偉業をたたえて石碑が建っていること、今でも「洪庵まつり」が行われていることなどに触れ、親近感をもつことができるようにしていきたい。

◇ 板書例



◇ 参考

緒方洪庵（1810～1863年）。江戸時代の終わりごろに活躍した蘭学者。岡山市の足守出身で、長崎で医学を学び、大阪で医師を開業。大阪に「適塾」を開いて、医者を目指す人々の教育を行った。

(3)ねらい

多くの人の命を守るために大切な思いについて考える中で、どのような状況にあっても命は救うべき努力をあきらめてはならない尊いものであることに気付き、自他の生命を大切にしようとする心情を育てる。

(4)展開

○は基本発問 ○は中心発問

学習活動	主な発問と児童の心の動き	指導上の留意点
1 命が守られていることを振り返り、めあてをつかむ。	<p>○ 「命を見つめようプロジェクト」をしてみてどう思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命は身近な人々に支えられている。 ・自分と直接関わりのないたくさんの人々から支えられているな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「命を見つめようプロジェクト」を振り返ることで、多くの命を守るときの大切な気持ちは何だろうという課題意識へと高めていくようする。
	多くの人の命を守るためにどのような気持ちが大切か考えよう。	
2 「種痘で人々の命を一緒方洪庵一」を読んで話し合う。	<p>○ 天然痘で苦しんでいる子どもを見た時の洪庵はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何もできなくて悔しい。 ・早く助けたい。 <p>○ 雨の日も風の日も町に出かけた時、洪庵はどんなことを思っていたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種痘をすることは無理かもしれない。 ・なんでみんな分かってくれないのだろう。 ・みんなに正しいことを知ってもらいたい。 ・一人でも多くの命を救いたい。 ・どの命も大切だから、何としても救いたい。 <p>○ 一日一日と種痘を受ける人が増えた時の洪庵はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信じてくれてうれしい。 ・命を救うことができてよかったです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・めあてを確認した後、教材の脚注を参考にして時代背景や天然痘という病気や種痘のしくみについて解説する。 ・ワークシートに考えを書くことで、多面的に考えられるようする。 ・「あきらめようと思った日もあったかもしれないけど、どうして洪庵はあきらめなかつたのか。」と発問することで、全ての命は尊いものであり、どんな状況になんでも守らなければならない大切さを感じ取ることができるようする。 ・種痘を受ける人々が増えた時の気持ちを確かめることで、人々の命を救うことができた喜びや達成感に気付くことができるようする。
	命はかけがえのないものであり、どのような時でも守らなければならない大切なものだという気持ちをもつことが大切だ。	
3 命を大切に思ってきたかについて振り返る。	<p>○ どんな時でも命は守らなければならない大切なものだと思ったことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害に遭われた方のために自分にできることはないかと考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・命はかけがえのない大切なものだと思ったことを話し合うことで、日々の生活の中で命を守ろうとする意欲を高められるようする。
4 教師の説話を聞く。	<p>○ 命を守るために一生懸命活動している人について話をします。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・命を守るための活動について話することで本時のまとめとする。
	これからも自分や他の人の命を大切にしながら生きていきたい。	
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ・命はかけがえのないものであり、どのような状況にあっても何よりも救う努力をあきらめてはならない尊いものであることに気付くことができたか。 ・これからも自分や他の人の命を大切にして生きていこうとする意欲を高めることができたか。 	

道徳ワークシート

種痘しゅうとうで人々の命を

—緒方洪庵おがたこうあん—

6年()組()

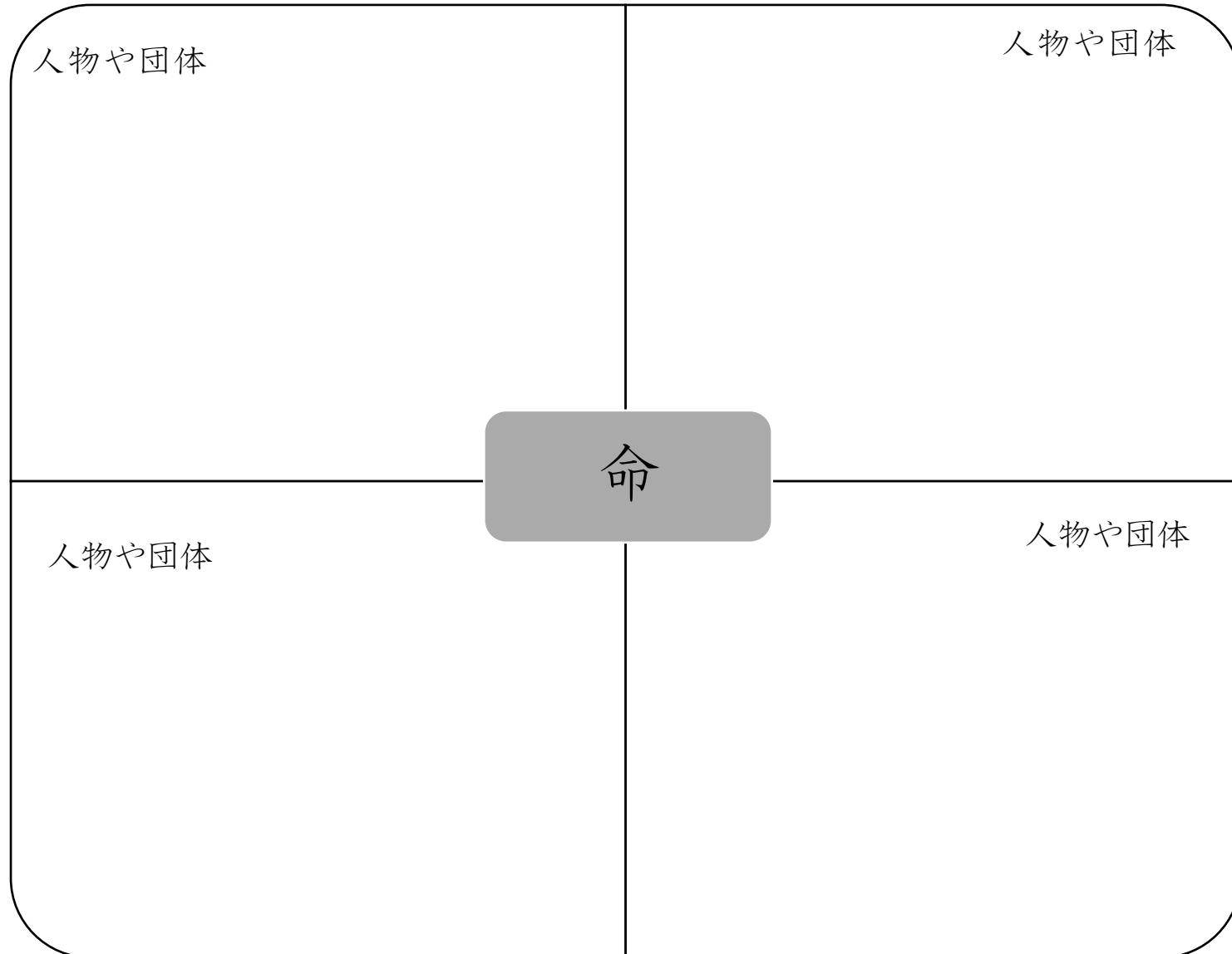
○雨の日も風の日も町に出かけた時、洪庵はどんなことを思っていた
のでしょうか。



--	--	--	--	--	--

6年()組()

○命を守ってくれる様々な人々について記録してみよう。



○命はどんな時でも守らなくてはいけない大切なものだと思ったこと
や命を守るために自分にできることを記録してみよう。

